

## 12. 言語使用パターンを変える

(ハインリッヒ・パトリック)

### 1. はじめに

消滅の危機に瀕する言語の使用パターンを変えるということは、簡単のように見えるかもしれないが、実は予想以上に困難である。本論文では、その課題を達成するために、どんな問題が扱われなければならないか、またどのような障害が克服されなければならないかを分析する。紙幅の都合上、言語教育の問題は本論文では検討できないが、読者はうちなーの継承言語教育に関して Heinrich (2008)を参照されたい。

言語シフトは非常に複雑なプロセスであるから、世界において類似している言語シフトというものには存在しないと言ってよい。これは危機言語研究者のあいだで常識となっている。琉球諸語のシフトは、国語イデオロギーの想定に基づいて、また戦争中の国家総動員(近藤 2006)および戦後の祖国復帰運動(小熊 1998)によって最も熱烈に広がった同化政策を原因としているが、琉球諸語それぞれ言語シフトも著しく異なっている(ハインリッヒ 2010)。しかし、その琉球諸語の相違にもかかわらず、奄美、国頭、うちなー、宮古、八重山、また与那国の六つの地域言語では(UNESCO 2009)、一般般的なパターンも発見できる。琉球のすべての言語の最も重要な類似点は、家庭内における世代間コミュニケーションで地域言語が使用されていないという点である。これは大きな問題である。なぜなら、家族における言語継承の断絶は言語死の原因となるからである。このような理由で、世代間言語継承の復活は言語復興と同義である。つまり、言語復興を目指すとは、家族内の言語選択を変えることが必然的な課題になるのである。家族の言語選択の大切さについて、スポルスキー(2010)は以下のようなことを論じている。

「最も基本的な言語使用領域は家族である。通常、家族は、親族名称(父、母、兄弟、祖父母)及び家族内での関係性により定義される概念である。それぞれの家族には、言語政策、つまり、言語変種に対する適切性と価値についての信念により規定される規則的・体系的な言語選択が存在する。また、移民した親自身が継承語を維持しようとしたり、子どもたちが新しい言語に急速にシフトするよう促したりする例に見られるように、家族には言語管理の根拠がはっきりと現れている。Fishman が明らかにしたように、家族内の言語政策の重要な特徴とは、乳児や子ども達にどの言語で話すかを決定することである。第一言語習得は非常に影響力の大きなプロセスであり、言語使用の動機付けを最も強める重要な学習機会であるため、この決定が言語維持に対して大きな影響を及ぼすことになる。」

従って、家族で危機言語を使用しなければ、家族外での言語維持を目指しても穴のあいたタイヤに空気を入れるのと同じような無理な努力に終わってしまう。もし、危機言語の

維持継承に「修理していない穴」があれば、やはり言語的な定常状態を達成することは不可能である(Nettle & Romaine 2000: 178)。しかし、その問題をどうやって克服できるのかは、世界中の危機言語によって異なる。すなわち、世代間の言語継承を復活するために、どのような具体的問題を克服しなければならないのか、諸言語共同体のあいだで異なる。言語選択を変えるつもりであれば、まず初めにその言語選択が行われる社会と文化的な環境を変更することが要求される。環境を変更するためには、言語復興より広い社会文化的の目的が必要とされる。従って、まずそのような「広い目的」の問題から言語使用パターンの変更を考察しよう。

## 2. 言語を超える目的の必要性について

言語選択は、言語に関するイデオロギーを反映する。それゆえに、言語選択を変更させる言語復興は、そのイデオロギーを変えることを要求する。しかし、言語の肯定的なイメージがあっても、イメージだけでは不十分である。言語復興に本当に有効なのは、イメージではなく、むしろ言語の社会的な機能である。すなわち、新しい潜在的な危機言語話者が行う新しい言語選択は、その選択によってどのような物質的・社会文化的な福利を享受できるかにかかっている。要約すれば、言語復興は社会的な情勢を作り直すということになる。つまり、言語復興は「言語そのもの」の考慮で始まるのではなく、価値をもつ、安定した、安全な、若年の大人の社会的・文化的基盤から始めなければならないと言える。多くの場合、そのような基盤が不在であるから、実際の言語復興が難しいと Fishman (2001: 229)は強調している。

消滅の危機に瀕した言語は多言語社会で使用される。危機言語と優勢言語は多くの場合、たがいに競争する言語である。さらに、危機言語は普通、劣勢のことばであるから、言語維持のためにその優勢言語に対する利点を得ることが必要である。利点がない場合、言語維持は不可能である。よって言語復興の活動は、まず利点を作らなければならない。いうまでもなく、危機言語は優勢言語の経済的及び実用的な優位性と最初から対等に競うことはできない(クルマス 1993)。その結果として、まず危機言語の文化的また社会心理的な価値を強調する必要がある。習慣的な言語使用が言語話者にとって「暖かさ」、「ユーモア」、「ステータス」、「心理的および社会経済的な利益」を与えない場合、その言語使用は存続しないだろう。危機言語は「経済的及び実用的な優位」がなくても良いが、「暖かさ」、「ユーモア」、「ステータス」、「心理的および社会経済的な利益」がない場合は言語が維持できない。仮に優勢言語がそのような機能においてさえも優れているのならば、人々は自発的にその言語だけを使うことだろう。実際に、1950年代の琉球弧にはそれが行われて、そして家族のなかでも日本語が使用された(Heinrich 2004を参照)。Mark Fettes (1997: 315)は、その必要性について以下のように述べている、「私達が話す言語の選択は、私達また私達の子供がどのような生活を送りたいかという選択であり、また私達がどのような世界を創造

するのかという選択である。」要するに言語復興は、過去の言語状況を復活する活動ではなく、未来志向の活動である。言語選択は、社会的、文化的及び経済的な環境を必ず反映するので、言語復興を実現するためには、その環境を変更しなければならない(Crawford 2000: 66-83)。言語復興を成功に導いたすべての例は、やはり言語を超える文化社会的な目的があったといえる。そのようなことから、言語使用パターンを変えるという言語復興の課題は、文化社会的な未来を創造するという目的の活動であるといっても良い。

言語維持および言語復興は、言語だけを対象にしているわけではないのだから、特定の言語パターンを達成するという目的以上の活動であるといえる。すなわち、ただ地域言語を使用する優勢言語話者と同じように行動するという考え方によって、言語復興は不可能である。それは世界中の言語復興の成功事例から学ぶことができる(Fishman 1991: 287-336 を参照)。例えば、カタルーニヤ語、ウェールズ語、あるいはケベックのフランス語の言語復活は、地域の主体性を求める運動と関連し、言語復活はその主体性の一つの論点でしかなかった。他方で、あまり成功していない言語復興運動においては言語を超えるという目的が欠乏していることも観察できる。例えば、アイルランド語の例では、「アイルランド語を話すアイルランド人のアイデンティティ」と「英語を話すアイルランド人のアイデンティティ」はどこで異なるのが解明されていない。従って、なぜアイルランド語が必要のかも解明されていない。地域主体でできたアイルランド共和国では、特にアイルランド語の社会的また文化的な機能が定義されていないので、アイルランド語の言語復興はあまり成果を上げたとはいえないのである。もし「英語を話すアイルランド人のアイデンティティ」と「アイルランド語を話すアイルランド人のアイデンティティ」のあいだの差違が言語だけであれば、アイルランド語は実際には必要ではない(Fishman 1991: 122-148 を参照)。言語復興を成功させるためには、その言語が使用社会の「幸福・安寧」(well-being)に貢献しなければならない。言語選択パターンを変える目的である言語復興運動に取り組む活動家は、その言語に基づいている文化社会的な理想と目的を明確にする必要がある。要するに、言語復興と文化社会的な変更はなぜ利益があり、またその目的を達成するために何が良いのか、何が悪いのか、を説明しなければならない。まず初めに、言語復興を実現させるためには、なぜ言語維持および復興が地域社会の時間および資源を投資する価値を持つ活動であるかを検討される必要がある。簡単にいえば、言語使用のパターンを変えるための最も重要な条件は、その新しい言語使用パターンに意味を与えることといえる。

さて、琉球諸語のケースはどのようなものであるか。筆者の琉球諸島における最初のインタビューでは、当時 22 歳の学生とうちなーぐちを調査していた伊波えりこに質問した。その際に、伊波に現在の琉球諸語の社会的な機能について尋ねた。その回答は以下の通りであった(2005 年 08 月 05 日)。

質問：うちなーぐちはどんな社会的な機能を果たしていますか。

伊波：社会的な機能はないですよ。それはやっぱりただ別のことばを話し、別の言語概念、別の文法とかを楽しむものです。

いうまでもなく、そのような状況は言語復興を効果的に誘発するシナリオではない。それにもかかわらず、伊波の言語状況の評価は適切であると思われる。現在、琉球諸語は、世代を超える広い人気があっても、120年以上に渡る国語イデオロギーによる同化政策の結果として、その地域言語は社会的な機能を失ったといえるだろう。他にインタビューした人々も伊波と同様の回答をしていたので、2005年夏の調査では、「地域言語の社会的な機能」に関する質問は質問リストから削除した。現在の日本では、未だに明治時代のイデオロギーによる「国家」、「民族」と「言語」を同等化し続けるので、言語維持と言語復興を進めたい言語活動家は、地域言語復興の必要性を説明する場合、困難に直面する(Heinrich 2010)。

しかし現時点において、琉球諸語の社会的な機能が広く認められない、あるいは発展していないといっても、そのような機能を復興発展させることができないというわけではない。琉球諸語は社会文化的な変更および社会的な幸福・安寧を促進するために、利用することができないということでもない(Fija *et al.* 2009を参照)。筆者は別の論文で、琉球諸語に関して、四つの広い分野から社会文化的な機能が開発できると論じた(Heinrich 2009)。すなわち琉球諸語は、知識の重要な根源として、社会文化的な雰囲気改善の手段として、地域社会のエンパワーメントの手段として、また21世紀の日本の市民権を再概念化するための手段として利用できる。しかし現時点では、それらの社会的な機能は未だに言語復興と関連していない。そのような関係を提供することは、琉球の諸言語復興の最も重要な前提条件を構成すると思われるが、その課題は言語学より運動活動のタスクであるから、これからの考察を琉球諸島における実際の言語選択に移りたい。

### 3. 現在の琉球諸島における言語選択

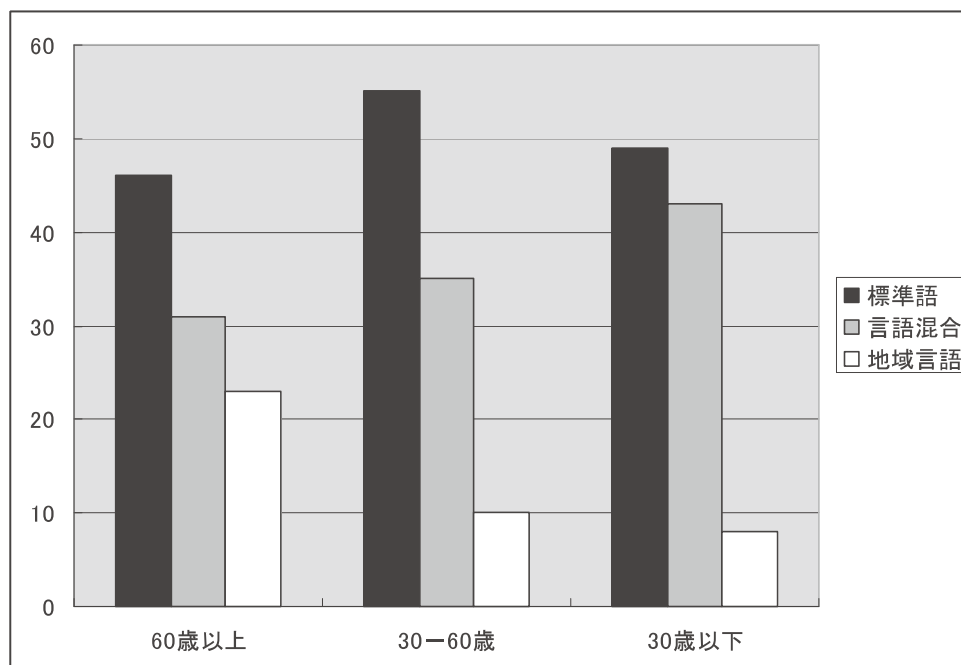
琉球弧の言語選択に関する考察は、まず方法論的かつ理論的な検討を必要とする。世界の言語多様性を維持することを考えた場合、危機言語を研究する学者の「言語」に関する概念は不適切であると言語生態系の支持者である Peter Mühlhäusler (2002、2003)は批判している。Mühlhäusler は具体的に三つの問題点を識別した：第一に、言語が社会文化的、地理的、政治的、また経済的環境から孤立できるという言語概念は不適當である。言語が消滅の危機に陥る原因は、言語そのものではなく、むしろ言語生態系といわれる言語の環境であるから、言語を復興するために、言語の生態系を変えることを要求する。第二に、言語が単に思想を送信する用具であるという概念はあまりにも狭く、そして不適當である。仮に言語が単に思想を伝える手段であったら、世界中でただ一つ言語のみを使用することが最良であると思われるが、実際はそうではない。第三、言語は互いから容易に区別する

ことができる、「単一実体」としての現象であるという概念は不適當であると Mühlhäusler は述べる。すべての危機言語話者は多言語話者であり、そして自分の継承言語以外に優勢言語も使用するから、その優勢言語がしだいに危機に瀕する継承言語の言語機能を引き受け、そして危機言語の使用領域はしだいに縮小する。いうまでもなく、そのような言語接触は危機言語の構造と使用パターンに強い影響を与える。それゆえに、危機言語の研究は危機言語と優勢言語の関係に十分注意を払わなければならない(ハインリッヒ & 杉田 2009)。また言語学においても「システムとしての言語」から「実践としての言語」への言語観のシフトが望ましい(Sugita 2007)。

琉球弧で行われる言語シフトには、コードスイッチングまた言語の混合が、重要な頻発な言語行動である(ハインリッヒ 2010)。60 歳以上、30 と 60 歳のあいだ、また 30 歳以下の年齢コーホートを区別すると、琉球弧の家族と近所では、以下の言語選択パターンが識別できる(データは 2005-2006 年に奄美、うちなー、宮古、石垣、および与那国で取得された)。

図 12.1 では、言語の混合が調査協力者の年齢にもかかわらず、重要な言語選択であると確認できる。上記の研究結果を根拠として、言語シフトは新しい混合された言語形態の形成と一致するということがわかるが、危機言語の研究の主流なアプローチではそのような言語使用には注意を払われない。それは Mühlhäusler が批判した危機言語研究に基づく「言語」の不明確の概念化に理由があると思われる。すなわち、主流の危機言語研究の言語概念は、危機言語使用の実情と合わない。そのジレンマを脱するために、Daniel Nettle (1999) は「言語プール」という新しい概念を提案した。人間の遺伝子プールと類似して、諸語にある言語構造のすべての要素が言語プールを構成する。そして、言語プールの「原子要素」は、「言語」ではなくむしろ「言語項目」である。特定の「言語」に関わらず、人々は独自の言語構造を部分的に学び使用する。その概念は頻繁なコードスイッチングと言語混合を含む琉球諸島における実際の言語使用パターンを説明するために非常に有力であると思われる。それゆえに、言語プール概念をうちなーのコンテキストに応用する研究がどのような結果を導き出すのかを考察しよう。

図 12.1：琉球弧における言語選択(総数：448人)



うちなーの言語使用に関する重要な調査では、Mark Anderson (2009: 45)はうちなーの言語プールのなかに四つの要素を識別する。その四つの要素は、「うちなー日本語」、「うちなーぐち」、「誤ったうちなーぐち」、および「新しく発明されたうちなーぐち」である。うちなー日本語はイントネーション、直示動詞の「来る」と「行く」、あるいは句末助詞の「はず」、「さ」、「ね」、「わけ」等々のよううちなーに限られる独特な言語使用を含む。誤った地域言語は、例えば誤った発音また文法的な間違いを含む。*/in/*および $/?in/$ (「縁」および「犬」を意味する)のような声門閉鎖音の有無における音韻的対立は、誤ったうちなーぐち使用においては対立がなくなる。ちなみに、かれらは「縁」と「犬」を両方とも $/in/$  [ $/?iN$ ]と発音し、そして結局日本語の音韻体系を再生産する。新しく発明された地域言語の一つの例は、「わじる」(怒る)ということばである。「わじる」はうちなーぐちの「わじゅん」(怒る)の語幹をとって、それに日本語の動詞語尾の「る」を付けたものである。うちなーの世代別の言語使用を説明するAndersonは、世代間で異なる言語プールの要素のアクセス、また別の言語構造と使用パターンが現われると指摘している。それらのパターンによって、四つの異なる言語使用者が識別できる。それは、1935年代前に生まれた「堪能話者」、1935年から1955年までに生まれた「ラスティ・スピーカー(rusty speaker)」、1955年から1985年までに生まれた「セミ・スピーカー」、および1985年後から生まれたの「単一話者」である (Anderson 2009: 270)。

この四つの異なる言語使用を定義する場合、堪能話者と単一話者の言語使用の説明は最も容易である。前者は日本語でもうちな一ぐちでも完全な言語行為を実行できる、後者は日本語のみ、あるいは非常に限られる地域言語、誤った地域言語と新しく発明された地域言語の要素を入れた言語のみ使用できる。堪能話者とラスティ・スピーカーのあいだの主な相違は、前者が形式的な場面でさえうちな一ぐちを使用するという点である。すなわち、丁寧な言語を使うことができる。従って、堪能話者は完全な言語行為が地域言語で発話できることに対して、ラスティ・スピーカーは場面によって、コードスイッチングあるいは言語混合をしなければ対応できない場合もある。その相違にも関わらず、堪能話者もラスティ・スピーカーも対等型の多言語話者であるといえる。要するに、程度は異なっても、両方とも日本語とうちな一ぐちを生産的かつ活発に話せるのである。

ラスティ・スピーカーはセミ・スピーカーより間違いが少なく、また後者より容易にコードスイッチングをする。簡単にいえば、従位型であるセミ・スピーカーの受動的な言語能力(*passive language skills*)は能動的な言語能力(*active language skills*)より発展している。従って、セミ・スピーカーは、受動的な多言語話者として描写することがベストであろう。すなわち、うちな一ぐちを理解しているが、能動的に話せることは困難である。そういう現象はまたセミ・リンガリズムともいえる。セミ・リンガルの言語使用は、言語的な知識を部分的に集めても、言語システムを構築するように整理されていない。むしろ、セミ・リンガルとしてのセミ・スピーカーは、限られた「言語項目」しか使えない。かれらの言語項目は、日常表現、定式表現、常用的な文章に限られるから、それらの要素の機能また使い方はほとんど不透明である。言語的な構造、またそれらの要素が何らかの方法で組み立てられているかがわからない、言語原則に基づいている新しい発話を創造する能力は実際に失われるといっても良いほどである(Sasse 1992: 63-64)。

さて、琉球弧では、日本語および地域言語を話すような明確なシナリオより、実際には人々が頻繁にコードスイッチングし、あるいは言語混合をするということが適当な描写であるといえる。その結果として、Anderson (2009)が取材したコーパスのなかには、以下のような異なる言語使用が包含されている。

うちな一ぐち：「*wattaa tukuma n'ippunun neeran*」(私達のところにもその一つでもない)。  
誤ったうちな一ぐち：「*'utu mutantin shimun yoo*」(夫なしでも、何とかやることができるよ)。

うちな一日本語のなかのうちな一ぐちの要素：「*wattaa minna matsu saa*」(私達は皆待つよ)。

うちな一日本語のなかの新しく発明された地域言語の要素：「*De mo are nanka no naka ni yoo shikasaa mo iru wake yoo*」(でもあれなんかにはよナンパもいるわけよ)。

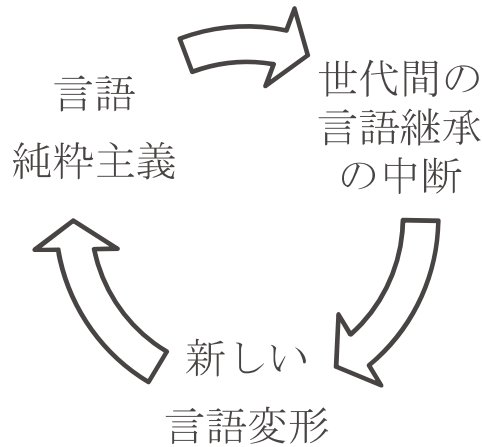
言語復興は単に地域言語を教えるということではなく、むしろ新しい言語選択および言語使用パターンを必要とする課題である。それを達成するためには、地域言語が社会的な機能を果たさないといけないということもわかる。さらに新しい言語形態、コードスイッチング、また言語混合のような言語行動は変えなければならない。そのために、言語だけではなく、言語を超える目的がなければ、だれもそのようなプロジェクトに参加しないはずである。また、理論的、方法論的、または実用的には、その言語行動の統一をどのように達成できるのかについては危機言語研究に関する文献のなかに助言が少ないといっても過言ではないであろう。このことは、危機言語研究のなかに「実践としての言語」より「システムとしての言語」が研究の中心となっていることのもう一つの証拠である。それゆえ、実践としての言語使用をどのように変えられるのかを考慮する場合、危機言語研究より「ことばの衛生」(verbal hygiene)が有望なアプローチであると思われる。従って、ことばの衛生と言語使用パターンの関係を探究する必要がある。

#### 4. ことばの衛生の役割について

ここまで、言語選択は世代間の言語継承と言語意識に支配される結果であるということ論じ、さらに言語シフトにコードスイッチングおよび言語混合が現れる現象があるとも述べてきた。コードスイッチングと言語混合は、言語シフトを構成する現象であり、そして言語消失をもたらすプロセスに重大な役割を果たしている。Margaret Florey (2004: 10) は、そのコンテキストで言語シフトのなかにいわゆる「言語消失のサイクル」を識別し、またそのサイクルが言語変化と言語混合の役割も明白にする。言語消失のサイクルの出発点は、言語シフトにおける言語変形である(例えば誤った言語使用)。そして、もっと「純粋」な言語を維持したい高齢者は、このような変形に対して保守的なまた純粋的な態度を持つ。それゆえに、あまり能弁ではない話者とコミュニケーションする場合、このような態度が地域言語使用を避ける可能性が高い。次の段階では、堪能話者の不足また世代間言語継承の中断によって、言語変形がさらに盛んになる。従って、そのように言語変形とその変形に起因する言語純粋主義の促進は言語シフトにさらに関与される。その結果として、堪能話者は彼らのあいだしか地域言語を使用しない、また地域言語の新しく現れた変形に対して、非常に批判的な態度を持つ。現在の琉球列島には、そのような言語消滅サイクルが機能している。その言語消失のサイクルは、堪能話者の観点から見ると以下の形である。



図 12.2：堪能話者の観点から見た言語消失サイクル



このような言語消失サイクルを、セミ・スピーカーまた単一話者、すなわち新しく混合された言語変形を使用する話者の観点から考察しよう。まず初めに、それらの混合された言語しか話せない話者は、堪能話者の混合言語に対する態度を考慮に入れ、かれらに対してそのような言語を使わない。2007年9月09日に仲村良雄に行ったインタビューで、仲村は「うちなーやまとぐち」といわれる新しい言語変形がたくさん入っている言語使用を知らないということが明白になった。その当時仲村は92歳であり、言語活動家の比嘉光龍(1969年生まれ)を伴って仲村をインタビューした。(比嘉は言語混合と地域言語を両方とも知っている少数の一人である)。

ハインリッヒ：うちなーやまとぐちはどう思いますか

比嘉：いや、先生はうちなーやまとぐちがわからないはず、これは孫たちの世代のことだから

ハインリッヒ：でも、ここには聞こえるではないですか、毎日、うちなーやまとぐち

比嘉：うちなーやまとぐちってわかります？

仲村：わからん

比嘉：例えば、「ちむい」、「ちむい」

仲村：なに？

皆：(笑)

比嘉：「ちむぐりさん」ということばがある、「ちむぐりさん」

仲村：うん

比嘉：若い、あの孫たちの世代は「ちむい」というんですよ、「ちむい」

ハインリッヒ：言語使用パターンを変える

仲村：これでもさ、那覇でも？

比嘉：那覇でも

ハインリッヒ：日本語では何という意味ですか

比嘉：日本語では「かわいそう」、「かわいそう」

仲村：ちむい？

皆：(笑)

仲村：初めて聞く

比嘉：これは新しい、この若者のことば。これはうちなーぐちでもない、やまとぐちでもない。作ったことば、若者が。後「はごい」ということばは最近出て来た、「はごい」

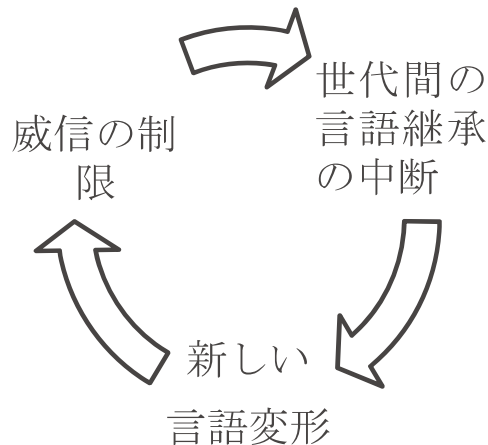
ハインリッヒ：「はごい」は何という意味？

比嘉：はごい、「汚い」という意味。で、うちなーぐちで「はごーさん」、日本語は「汚い」。汚いの「い」と「はごーさん」の「はご」、「はごい」。

仲村：(笑)新しいことば

一方、若年または中年の世代の話者が非公式な場面で楽しんで言語を混合しても(杉田 2010 を参照)、これらの言語使用は威信(prestige)が少ない、そして限られた場面、限られた聞き手に対してしか使われないとの意識があるということがわかる。従って、受動的な地域言語能力の人々の観点からみると、言語消失サイクルは以下のようである。

図 12.3：受動的な地域言語能力の話者の観点から見た言語消失サイクル



言語復興は、最終的にそれらの言語消失サイクルを破壊しなければならない。言い換えると、世代間の統一した言語選択パターンを復活しなければならない。いうまでもなく、

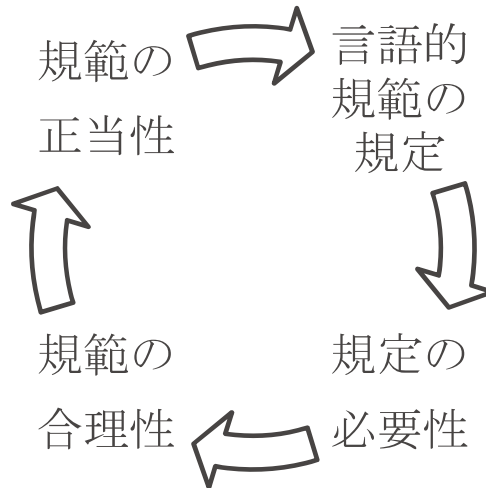
その目的のためには、地域言語話者が最も貴重な資源である。しかし、同時にその地域言語の未来は、若い世代にかかっている。逆行的言語シフトは、あらゆる新しい世代によって新たに達成される必要性を避けるために、若い世代が地域言語を獲得しなければならない。またそのために、地域言語は家族で話されなければならない。ところで、言語復興の努力が学校に限られれば、あらゆる世代が新たに言語復興を達成しなければならない。その理由で、言語復興の努力は家族に焦点を合わせ、それらの言語使用領域に各世代を超えて地域言語使用を復活しなければならない。具体的にいえば、言語消失サイクルは相互学習、言語適応、および言語訂正のメカニズムに取替えられる必要がある。言語能力の欠乏および言語訂正のメカニズムの不在のため、セミ・スピーカーまたは単一言語話者が、地域言語話者の言語能力を獲得できない。その点で、ことばの衛生が必要になる。

言語的規範(norm)は、Deborah Cameron (1995)が「ことばの衛生」と呼ばれる評価的なディスクールによって再生産させ、また新しい使用に適用した。従って、Cameronによると、ことばの衛生は言語に基本的また根本的なものであると論じる。言語シフトにより世代間で中断されたことばの衛生が、逆行的言語シフトのために再建されることが必要である。ことばの衛生は、感知された危険から言語を保護するために実行され、またその目的を果たすために、言語に対して固定的およびある特定の基準にあわせる努力である(Cameron 1995: 25)。このような努力が、言語活力の高い言語にはいつでも行われるが、危機言語では、そのような保護的なディスクールが言語能力のあまり高くない人に対して中断されたのである。ことばの衛生の中断は絶えず新しい言語変形をもたらし、また世代間で地域言語が安定して使用されないという事態をもたらす。ことばの衛生は、新しい場面と使用に標準を付与するメカニズムである。例外なく、すべてのコミュニケーションが言語構造、また言語機能に関する言語イデオロギーによって導かれるという事実があるから、言語は単に「妥当性」(adequacy)あるいは「威信」(prestige)を根拠に判断することができない。すなわち、話者は言語イデオロギーによって「ある言語使用は他の言語使用より価値がある」と感知すると Cameron(1995: 224)は強調する。そのため、言語復興には「何か価値があるのか」、またそれが「なぜ価値があるのか」という世代間のディスクールを再建することが要求される。

ことばの衛生は、言語システムそのものだけではなく、むしろ文化、歴史、アイデンティティ等々のイデオロギーを含み、また構成するから、そのような世代間に包括的なことばの衛生のディスクールは、言語消失サイクルを取り替え、言語復興に貢献すべきである。そのサイクルにおいては、まず始めに言語選択が世代間で統一されなければならないことが必要とされるので、標準の規定が不可避である。従って、過去および現在の言語使用、現在の言語使用条件及び社会状況、経済状況等々を考慮に入れて、標準の必要性とその合理化に関するディスクールを開始することがきわめて重要である。そのようなディスクー

ルの開始は、また新たなことばの衛生のディスクールの刺激となり、そしてまたサイクルを構成する。ことばの衛生サイクルは以下の図のようになる。

図 12.4：ことばの衛生サイクル



言語復興は、その言語が新しい使用領域、また新しい機能で使用されることを要求するので、言語の変更が不可避である。従って、言語の新しい機能、そして新しい形態を受け入れることは、その危機言語話者の言語意識に決定的に頼っていると Kendall King (2001: 97)が述べている。そのような態度は、一方でことばの衛生を要求する。危機言語を研究する言語学者も、そのことばの衛生サイクルに対して役割を果たさなければならないと思われる。しかしながら、かれらの役割は言語規則の選択と決定ではなく、むしろ実践としての言語に関する情報を言語共同体に提供し、また「良い言語使用」に関する規則の決定のために知識を提供することである(Greenbaum 1988 を参照)。だからこそ危機言語研究は、言語記録保存に加え、その危機言語共同体の活動への関与、また言語共同体に研究結果を普及することが必要である(Dwyer 2006、本論文集の石原論文も参照)。

## 5. まとめと今後の課題

本稿を通して、言語選択を変えることは複数の活動を含むということを指摘してきた。まず始めに、地域言語がなぜ重要であるのかを正当化することが最も大切な出発点である。有力な正当化は、ウェールズ語やハワイ語のような成功した言語復興運動には見出せるが、アイルランド語やアイヌ語のような未だにあまり成功していない言語復興運動にはあまり見いだせない。言語復興は、新しい言語形態および新しい言語機能の加えることを必要とするから、その言語変化に関して世代間に行われることばの衛生ディスクールを開始し

なければならない。ちなみに、言語復興のためには、継承言語教育だけでは不十分である。むしろ、言語復興活動家が地域言語を使用する世代間のコミュニケーションをどのように復活できるのかということを考慮しなければならない。本論文で論じた理論的また方法論的な概念に基づいて、琉球の六つの地域言語は、各地域が独自の具体策を策定することが必要とする。いうまでもなく、その具体策の策定が早ければ早いほど琉球諸語の将来は安全になる。言語学者は、有効な手段を計画するために、自分の専門知識を提供する必要がある。琉球弧の継承言語としての地域言語が 21 世紀に存続するために、言語復興活動家と危機言語学者は、これからより親密に協力しなければならない。もしも、この論文が琉球弧の継承言語を維持したいと願っている人々の援助となれば、著者にとって最大の喜びになる。

#### インタビュー

伊波えりこ(2005年08月05日)、うちなー。

仲村良雄(2007年08月09日)、うちなー。

#### 参考文献

- Anderson, Mark (2009) *Emergent Language Shift in Okinawa*. University of Sydney: Unpublished PhD Thesis.
- Cameron, Deborah (1995) *Verbal Hygiene*. London: Routledge.
- クルマス・フロリアン(1993)『ことばの経済学』東京：大修館。
- Crawford, James (2000) *At War with Diversity. US Language Policy in an Age of Anxiety*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Dwyer, Arienne M. (2006) “Ethics and Practicalities of Cooperative Fieldwork and Analysis” in: Jost Gippert, Nikolaus P. Himmelmann & Ulrike Mosel (eds.): *Essentials of Language Documentation*. Berlin: Mouton de Gruyter: 31—66.
- Fettes, Mark (1997) “Stabilizing What? An Ecological Approach to Language Renewal” in: Jon Reyhmer (ed.): *Teaching Indigenous Languages*. Flagstaff: Northern Arizona University: 301—318.
- Fija, Byron, Matthias Brenzinger & Patrick Heinrich (2009) “The Ryukyu’s and Japan’s New, But Endangered Languages” in: *The Asia Pacific Journal* 10-2-09, May 9, 2009. <<http://japanfocus.org/-Fija-Bairon/3138>>, アクセス：2009年10月13日。
- Fishman, Joshua A. (1991) *Reversing Language Shift*. Clevedon: Multilingual Matters.

- Fishman, Joshua A. (2001) “If Threatened Languages Can be Saved, then Can Dead Languages be Revived?” in: *Current Issues in Language Planning* 2.2/3: 222—230.
- Florey, Margaret (2004) “Countering Purism. Confronting the Emergence of New Varieties in a Training Program for Community Language Workers” in: Peter K. Austin (ed.): *Language Documentation and Description* 2: London: SOAS: 9—27.
- Greenbaum, Sydney (1988) *Good English and the Grammarian*. London: Longman.
- Heinrich, Patrick (2004) “Language Planning and Language Ideology in the Ryukyu Islands” in: *Language Policy* 3(2): 153—179.
- Heinrich, Patrick (2008) “Establishing Okinawan Heritage Language Education” in: Patrick Heinrich & Yuko Sugita (eds): *Japanese as Foreign Language in the Age of Globalization*. München: Iudicium: 65—86.
- Heinrich, Patrick (2009) “The Ryukyuan Languages in the 21st Century Global Society” in: Masanori Nakahodo, Katsunori Yamazato & Masahide Ishihara (eds.): *Human Migration and the 21st Century Global Society*. Okinawa: University of the Ryukyus: 16—27.
- Heinrich, Patrick (2010) “Difficulties of Establishing Heritage Language Education in Uchinaa” in: Patrick Heinrich & Christian Galan (eds): *Language Life in Japan: Transformations and Prospects*. Routledge: London: 34—49.
- ハインリッヒ・パトリック(2010)「琉球諸島における言語シフト」ハインリッヒ・パトリック&松尾慎(編)『東アジアにおける言語復興』東京：三元社：147—173.
- ハインリッヒ・パトリック&杉田優子(2009)「危機言語記録保存と言語復興の統合へ向けて」『社会言語科学』11(2): 15—27.
- King, Kendall A. (2001) *Language Revitalization Processes and Prospects. Quichua in the Ecuadorian Andes*. Clevedon: Multilingual Matters.
- 近藤健一郎(2006)『近代沖縄における教育と国民統合』札幌：北海道大学出版.
- Mühlhäusler, Peter (2002) “Why One Cannot Preserve Languages (But Can Preserve Language Ecologies)” in: David Bradely & Maya Bradely (eds): *Language Endangerment and Language Maintenance*. London: RoutledgeCurzon: 34—39.
- Mühlhäusler, Peter (2003) *Language of Environment – Environment of Language*. London: Battlebridge.

- Nettle, Daniel (1999) *Linguistic Diversity*. Oxford: Oxford University Press.
- Nettle, Daniel & Suzanne Romaine (2000) *Vanishing Voices. The Extinction of the World's Languages*. Oxford: Oxford University Press.
- 小熊英二(1998)『「日本人」の境界』東京：新曜社.
- Sasse, Hans-Jürgen (1992) “Language Decay and Contact-Induced Change. Similarities and Differences” in: Matthias Brenzinger (ed.): *Language Death: Factual and Theoretical Explorations with Special Reference to East Africa*. Berlin: Mouton de Gruyter: 59—80.
- 杉田優子(2010)「〈実践としての言語〉の記録保存・うちなーの多言語社会再生へ向けて」ハインリッヒ・パトリック&松尾慎(編)『東アジアにおける言語復興』東京：三元社.
- Sugita, Yuko (2007) “Language Revitalization or Language Fossilization? Some Suggestions for Language Documentation from the Viewpoint of Interactional Linguistics” in: Peter K. Austin, Oliver Bond & David Nathan (eds): *Proceedings of Conference on Language Documentation and Linguistic Theory*. London: SOAS University of London: 242—250.
- スボルスキー・バーナード(2010)「世代間言語継承に関する予測」ハインリッヒ・パトリック&松尾慎(編)『東アジアにおける言語復興』東京：三元社：229—254.
- UNESCO (2009) *Interactive Atlas of the World's Languages in Danger*. <http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?pg=00206>, アクセス：2009年05月08日.